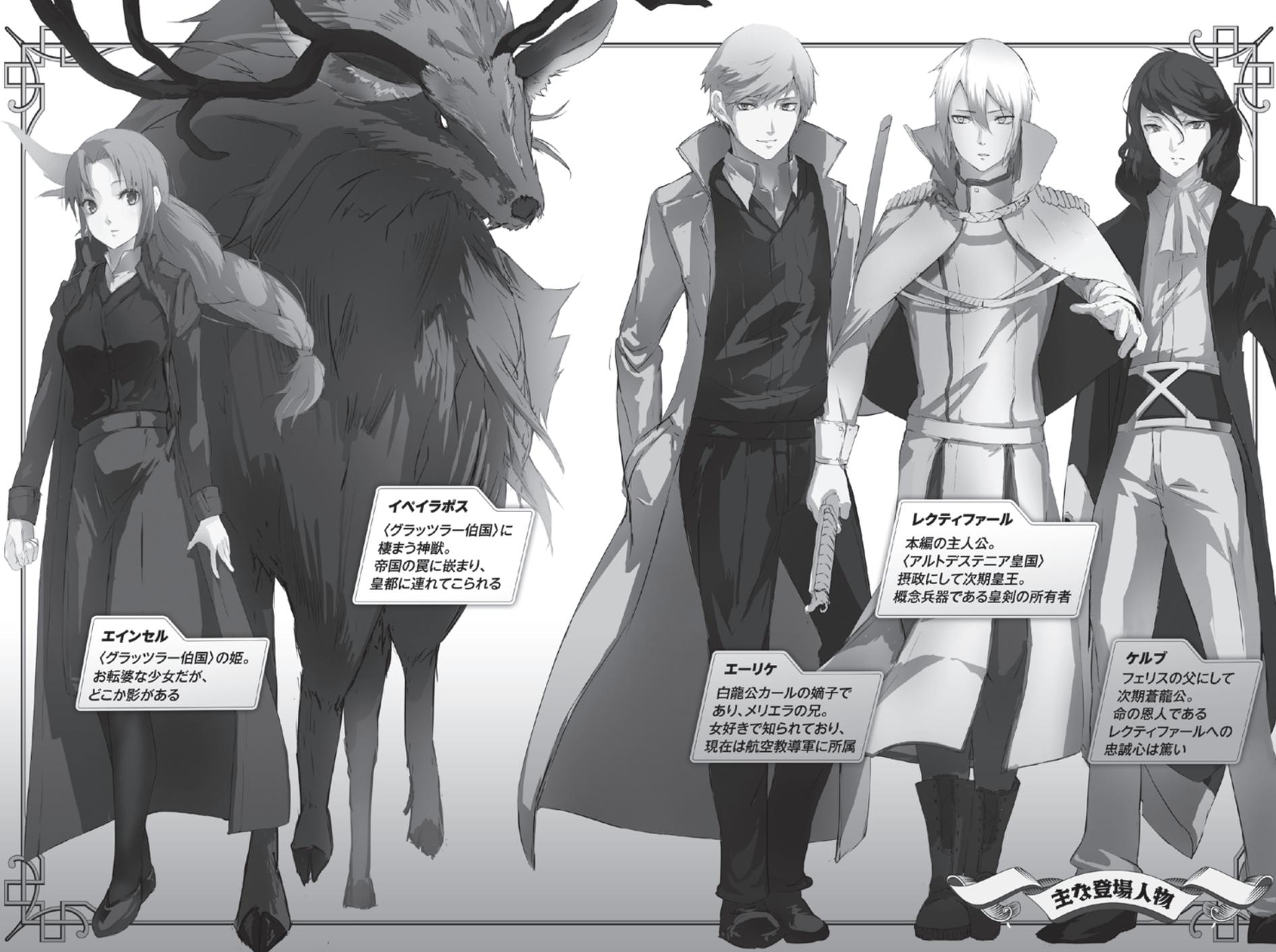


白の皇国物語

17



**イベイラポス**

〈グラッツラー伯国〉に  
棲まう神獣。  
帝国の翼に嵌まり、  
皇都に連れてこられる

**エインセル**

〈グラッツラー伯国〉の姫。  
お転婆な少女だが、  
どこか影がある

**エーリケ**

白龍公カールの嫡子で  
あり、メリエラの兄。  
女好きで知られており、  
現在は航空教導軍に所属

**レクティファール**

本編の主人公。  
〈アルトステニア皇国〉  
摂政にして次期皇王。  
概念兵器である皇剣の所有者

**ケルブ**

フェリスの父にして  
次期蒼龍公。  
命の恩人である  
レクティファールへの  
忠誠心は篤い

主な登場人物



新生アルマダ帝国

マルドゥック王国

アクイタニア王国

自由騎士国ガイエンルツヴァイテ

グラッツラー伯国

アルトステニア皇国

都市同盟

アルマダ大陸

目次

第一章	グラッツラーの姫たち	10
第二章	伯都にて	60
第三章	忍び寄る悲劇	85
第四章	腐 <small>くさ</small> る空	133
第五章	エインセルの決断	213
第六章	かつての者	245

嵐の夜。

破滅の嵐。

あの雨は生きとし生けるものの肉を喰らい、地に死を振り撒<sup>ま</sup>く。

世界が喰われていく。

私の世界が喰い荒らされていく。

私の過去、私の現在、私の未来が喰われていく。

なにもかも、すべて。

## 第一章 グラッツラーの姫たち

グラッツラー伯爵家には、数多の姫がいる。

それは、この家が外交によつて国を成り立たせているひとつの証だった。

「エインセルは？」

現在伯爵家に残っている姫の中でもっとも年長である次女ライゼラが、妹たちを眺めながら三つ下の妹の所在を訊ねる。

「街に行く」と

それに答えたのは、エインセルのすぐ下の妹、アイリアだった。

「またあの子は……今は大変な時期だつて分かつているでしょうに……」

ライゼラは溜息を吐くが、彼女と同じように憂鬱そうな表情を浮かべているのは、わずか二名だけだ。

この場にいる彼女の姉妹は十一人。しかも、全員がある程度分別が付いているはずの年齢だというのに、ライゼラの言葉の意味を理解できるのは、その二名だけなのだ。

「仕方がないわ、お姉様」

二名のうちのひとり、フォルナが衣裳の裾を整えつつ長椅子に腰を下ろすと、右手の人差し指を立てた。その仕草で、彼女が首から提げている、鎖付きの小さな眼鏡がかちやりと鳴る。

「あの子はそういう風に育てられたもの。——あの子だけね」

「だからつて、父上に文句を言うわけにもいかないわよ」

「あの……お姉様方？ わたくしたちにも分かるようにお喋りしていただけると嬉しいのですけど」

ライゼラたちの会話に口を挟んできたのは、フォルナの双子の姉ディルナだ。

金に近い銀髪を持つフォルナに対し、ディルナは人目を引く輝かしい金の髪を持っている。彼女が動けば誰もがその仕草に注目せざるを得ない、そう言われるほどの容姿の持ち主だった。

しかし、それだけの姫だ。

「——そうね、ごめんなさい」

ライゼラは妹たちをもう一度見回す。

（お父さまの“商品”たち……こんな状況じゃあまり役に立てないわね）

伯爵家には多くの姫がいる。

政治や経済、司法、軍事に明るい者も、学問に通じ、研究者として将来を囑望されている者も、

舞踊の大家として各国に多くの出資者を持つ者も、あるいはただひたすらに男を立てることに長けた者や、まったく長所と呼べるものがない者もいる。

あらゆる場所に「縁組み」という取引をもって縁者を送り込むため、グラッツラー伯爵家は一族の者まで自らの養子として抱えることで多くの姫を揃えた。

権力者同士の婚姻など、必要な相手と縁を結ぶだけのものという認識が、世間の多くを占めている。しかしグラッツラー伯爵家は、相手が必要とする者を提供することで、可能な限りその縁を利用しようとした。

縁組みはしたものの、すぐに離縁となつては逆効果にもなりかねないから、彼らの方法はそれほど間違つたものではない。だが、じっくり双方の相性を確かめる皇国や、建前だけでも自由恋愛を掲げている民主国家群などのような余裕は、グラッツラーにはなかった。それでも彼ら小国は、常に中大国の意向に従いつつも、自分の要求を押し通す強かさが必要だった。

グラッツラー伯爵家はそのために、ありとあらゆる趣味嗜好に応えられる姫を作つたのだ。優れた政治的助言者を求める家には、古今の帝王学と政治経済学を修めた者を。

社交界を優雅に泳ぎ、自家の名を高める者を望む家には、容姿に優れ、文化分野で多くの友人を持つ者を。

決して出しゃばらず、家中の取りまとめをする者を求める家には、家政に長け、しかし過剰な存在感を持たない者を。

武門に相応しい強さと気高さを持つ者を求める家には、各国へ軍事留学し、各国軍に伝手を持つ者を。

ただひたすらに美しい花を求める家には、中原一の美との評判を持つ者を。  
多くの子を持つ母としての能力を求める家には、多産の血を引く者を。

なにも分かんず、邪念を抱かず、夫のためだけに過ごす者を求める家には、他者へ笑みを向けることになよりの喜びを抱く者を。

グラッツラーは、そうして生きてきた。

軍事力を持たず、しかしあらゆる国にとつて都合の良い国として生き抜く道を選んだ。

中立であるグラッツラーを介せば、あらゆる国との外交が可能になる——そんな評価を得るために。

「みんな、最近起きた問題は知っているかしら？」

ライゼラが問うと、半数の妹たちは首を傾げた。そして近くにいる姉妹と言葉を交わし、なにか知っているかと訊いている。

そして残りの半数のうち、ただ黙って笑みを浮かべている者が二名。彼女たちは事情を知っているかも知らなくても、決して求められるまでは会話に入らないよう教育を受けている。

やはりというか、ライゼラの問いに明確な答えを持つているのは、先ほどの二名だけのように

だった。

「アルトデステニアの皇都で、イペイロス様が暴れた件、やはり大きな問題になっているのか？」  
乗馬服に帯剣という、姫と呼ぶにはいささか物騒な出で立ちの四女ヘンリアが、事情を一番知っているらしい姉に問い返す。

ごく最近まで西域に軍事留学に出ていたため、彼女はまだ国内の状況に詳しくなかった。

「ええ、大問題よ」

ライゼラの返答に、姉妹たちがどよめく。

彼女たちはあまり多くの知識を与えられていないが、それでもまったく知らないわけではない。愚かと無知はまったく別のものなのだ。

「でも、お父様たちがなんとかしてくださるのでしょうか？ お姉様たちも……」

姉たちの考えは、決して根拠のないものではない。

これまで国に危機が訪れたとき、伯爵家は自分たちと自分たちが作り上げてきた外交網を駆使して生き残ってきた。

だからこそ、伯都には様々な国の商人たちが訪れるし、政治の緩衝地帯として各国が頼りにしてきたのである。

しかし、今回に限ればそれも難しい。

すでに外交努力で状況を変化させられる段階ではないからだ。

「——分かりません。お父様たちは屋敷にも戻らず城で合議をしていますが、おそらくこれと言った妙案が出ることはないでしょう」

「なら、わたくしたちがなんとかすればよろしいではありませんか？」

妹のひとりがそう口にする、それに同意するように何人かが頷いた。

（たしかに今までならば、私たちのお力で少しはお役に立てた。だけど、今は……）

ライゼラは異国に嫁いだ姉からの手紙で、グラッツラーの置かれた状況が非常に悪いものであることを知らされた。

グラッツラーの行ったことは『異国の首都を奇襲』という外交的にも常識的にもありえない愚行だ。いくら皇国が事を荒立てないように最低限の非難で済ませたとしても、皇都には各国の大使館もあるし、商人たちもいる。イペイロスの存在は各国に知れ渡り、それを崇めるグラッツラーの立場が悪くなるのは当然だった。

「それに、悪いのはイペイロス様を連れ去った者たちではありませんか。わたしたちは被害者ですよ！」

「イペイロス様が連れ去られた経緯については、皇国も見舞いの言葉を口にしたらしい。だが、それとこれとは別の話だ」

「でも……！」

ヘンリアと妹たちの言い争いを聞きながら、ライゼラは今後のグラッツラーの取るべき道につい

て考えを巡らせる。

一番効果的なのは、グラッツラーと親交が深い各国に仲介を依頼することだ。諸外国から圧力を与えられれば、国際協調を重んじる皇国のことだ、少なくとも無反応ということはないだろう。

次善の策としては、単独で皇国に譲歩を強いるというものもある。これならば各国に借りを作ることはなく、従って今後の国政に嘴を挟まれることもない。

グラッツラーのような小国にとって、諸外国からの干渉は避けて通ることができないものだ。だからといって、それを無制限に受け入れることは不可能である。

どこかの国に利益を与えれば、別の国の利益を損なうことになる。利益と不利益の均衡をいかに維持するか、グラッツラーは外交において常にそうした努力を重ねてきた。

(でも……)

だが、今のグラッツラーはそれさえも難しい状況にある。

通常の軍事衝突は、双方に瑕疵がある場合がほとんどだ。他方、今回の騒動では、一方的にグラッツラー側に問題がある。

これでは諸外国からの圧力もあまり意味をなさないし、なによりもグラッツラーに力を貸そうという国が出てくる可能性はあまり高くない。

どう考えても分の悪い賭けだからだ。

各国もグラッツラーの価値は分かっている。しかしそれは皇国とことを構えるに見合うほどだろ

うか。

大国の怒りとは、中小国にとつて災害のようなものだ。

何らかの準備をすることもできるし、そこから復興することもできる。だが、災害が荒れ狂っている間、彼らは身体を丸め、天に運を任せるしかない。

それが小国、相手を虐げるだけの力を持たない人々の生き方である。

実はこのとき、皇国と交渉していたのは、グラッツラーだけではなかった。

グラッツラーと協力関係にある幾つかの国が、皇国からの譲歩を引き出すべく必死の交渉を行っていた。

当代伯爵の妃の兄であり、隣国〈ヘリユーン大公国〉の大公だったヨハン・ウムナ・ライ・ベリユーン。彼は、同じく伯爵家と縁戚関係にある人々を率いて、レクティファールと直接交渉をしている。

偶然にも外遊の最中に皇都で騒動に巻き込まれ、伯爵家たつての願いということもあって、レクティファールの説得に赴いたのだ。

だが、彼は予想以上の困難に直面することになる。

「交渉というのは、少なくとも卓の上では優雅であるものと私は思っていた。卓の下で足を蹴り合うことはあっても、目に見える場所で醜い争いをするのではないのだと」

彼と面会したレクティファールは、そんなごく初歩の外交的諧謔さえ次元の彼方に蹴り飛ばすような男だったのだ。

「我々はみな、交渉は卓の上の札遊びのようなものだと思っていた。暖炉で暖められた部屋で、飲み物と菓子と口にしながらか、相手との妥協点を探るものだと思っていた。しかし、彼らは違った」ヨハンの言葉を引用するならば、このときの皇国の交渉とは『部屋の外に広がる優美な庭園に幾重もの砲を並べ、彼らのいる暖かな部屋の隣室を吹き飛ばし、呆然とする人々をよそに札遊びの卓に座り、心からの笑みで札を請う』ようなものだったという。

卓をひっくり返すところではない。交渉に参加している者たちを自分ごとまとめて始末することも辞さないという苛烈な姿勢に、ヨハンたちは皇国の怒りのほどを理解する。

彼らはそれをそのまま伯国側に伝え、伯国は自分たちが予想よりも遙かに厄介な状況に追い詰められていることを再認識した。

さらに同時期から、伯国と親交の深い各国が、暗に伯国側に譲歩を促す書簡を送ってくるようになる。

ベリユーンから各国へともたらされた皇国の怒りは、これまでの国家間の友情さえ危うくさせるほどだったのだ。

「首都を攻撃されて怒りを抱かない国はない」

伯国への書簡には言葉こそ変えてあったが、概ねそのようなことが記されていた。

国の威信などもあるだろうが、なによりも皇都の多くの住人を巻き込んだことが問題となった。

かつて西方民主連合が皇国に攻め入ったとき、連合軍はどのような目に遭ったか。

レクティファールの率いる龍の軍勢に蹴散らされ、政権の基盤さえ危うくなるほどの打撃を受けたではないか。

伯国では政治を担う者たちが総出で、今回の騒動への対処を始めた。

「それで、皇国の皇王様はどのような者が好みなのでしょうか？ やはり大国の王らしく、見目麗しい方？ それとも朴訥とした方が意外と好かれるかも」

「見た目だけではだめなのではなくて？ あの国は娼婦とて王になれる国ですもの、ただ見た目が良いだけの娘など、歯牙にも掛けないではありませんか？」

「では、武に長けた娘？」

妹たちの視線を浴びながら、ある程度年齢が高く、武人肌で、嫁ぎ先の決まっていないヘンリアが咳払いをする。

レクティファールの話を聞いてから、そうした可能性については彼女自身も考えた。しかし可能性はあるとしても、自分が嫁いだところでそれほどの価値は見出されないだろうとも思っていた。

「——生憎だが、私以上の軍事教育を受けた方がすぐ近くにおられるよ。実質的に後宮を二分している勢力のうち一方の領袖は、現役の侍従武官だ」

「まあ、そうだったの。じゃあ、芸事に長けた方？ ミューランさんとか」  
次に名前が出たのは、姉妹の中でもっとも芸術的才覚に秀でた姫の名前だ。  
多くの絵画を手掛け、舞台演出家としても囑望しよぼうされている。

「ミューランさん、まだお仕事からお戻りにならないの。やっぱり南洋の島は遠いのね」  
「皇国の飛竜便ならあつという間よ。とても速いんだから！」

わいわいと好き勝手に話しはじめた妹たちを見て、ライゼラは溜息ためいきを吐いた。

あとで、話を通じる姉妹だけで話し合った方がいいだろう。

（でも意外と、あんな風かぜに姦しいだけの女の方が、気に入ってもらえるかもしれないわね。きっと姫らしい姫なんて気にも留めないでしょうし）

彼女の考えは半分当たり、半分外れていた。

レクティファールの下へ嫁ぐことになる姫は、彼女の考えていた『姫らしさのない姫』ではあつたものの、彼女が想定していた妹の誰でもなかったのだ。



鉄獣てつじゆう。

皇国鉄道の列車を示す言葉としてもっとも定着しているのは、おそらくその一語だろう。

これは皇国鉄道が開業した際に、それまで皇国の物流を担っていた馬車や竜車りゆうしやと比較して付けられたものだった。

鉄獣現る、という見出しとともに、魔導機関車が平原を走る写真が掲載され、人々は皇国に新たな時代が来たのだと認識した。

実際、鉄道の完成によって皇国内での物流の大半は彼らが担うようになり、馬車や竜車などは物資の集積地から村落や各個人の家まで運ぶために用いられるようになった。

やがてその役目も魔動車が引き継ぎ、馬車や竜車は儀礼用を除けば、今ではごく一部でしか使われていない。

まさに皇国の大動脈。国土を要塞化した皇国にとって、鉄道網は欠くべからざる存在である。計画当初から軍用規格での建設が決まっており、現在でも主要路線の鉄路の保守点検は、軍が管轄している。鉄道の運営を担う『皇国鉄道株式会社』が保有するのは、民間向けの車輛や軍以外の駅施設あたりで、車輛基地などは軍が管理していた。運転手や車掌も軍人経験がある者が大半で、有事の際に円滑に軍と連携できるよう緊密な連絡が行われている。

ただし、軍用鉄道という区分であれば、皇国以外の国でも珍しいものではない。皇国に遅れること二〇年、現在のアルマダ帝国の前身である人間種国家共同体で鉄道網が整備されはじめた上、実は同時期には大陸各地で鉄道建設が活発化していた。

しかし皇国以外の国では、皇国ほど巨大な鉄道が作られることはなかった。

巨大な鉄道はその大きさに見合った輸送力を持つが、それ以上に多くの予算を必要とする。特に民間需要との兼ね合いが重要視され、皇国の鉄道をそのまま自国でも再現したい軍部と、可能な限り予算を縮小したい政府との間で議論が重ねられた国は多かつたという。

それでも、最終的に皇国とまったく同規模の鉄道を整備できた国はなかつた。

装甲車輛<sup>しゃりょう</sup>や自動人形を分解せずに輸送車ごと貨車に載せることができ、短時間での戦力展開が可能、さらには大型の装甲列車なども開発し、列車そのものを戦力化する——という各国軍の野望は完全に潰<sup>つぶ</sup>えた。

とてもではないが、各国の軍事予算では賄<sup>まかな</sup>いきれなかつたのだ。だから、皇国は軍だけで鉄道すべてを管理運営していない。民間企業をかませることで、無理なく維持できている。

実は、皇国鉄道株式会社の保有する施設は、利益が見込めるものに限定されていた。鐵路や車輛<sup>しゃりょう</sup>の補修については、軍にある程度決まった委託金を支払う形なので、必要以上に予算が食われることはない。

金の掛かる部分をすべて軍に任せているからこそ、皇国鉄道株式会社は巨大商会として発展し続けられるのだろう。

では、それを押しつけられた軍は損ばかりかというところ、そのようなことはない。

鐵路の補修は国防の要<sup>かぎ</sup>である鉄道を守るために不可欠なことで、これを民間に委託することは軍

としては絶対に避けたい。他国では予算の縮小を名目にして真つ先に民間委託されるようなことも、軍の機能を維持するために必要と判断されれば、軍の職掌<sup>しやくさう</sup>となるのが皇国なのだ。

要塞として整備された国土を十全に機能させるのに、当然ながら鉄道網は欠かせない。

同じように、港湾事業や魔動車を用いた輸送についても、軍が管理している部分が存在しており、時折これを理由にして皇国を軍事独裁国家と呼ぶ者もいた。

もっとも、そう呼ばれたところで皇国の民は気にしない。

軍事偏重で、絶対権力者が国権を握っているのは事実だからだ。

それが自分たちの生活を守るために役立つのならば、批判など気にする必要はない。

皇国鉄道にしても、乗客は自分たちが乗っている車輛<sup>しゃりょう</sup>が皇鉄——皇国鉄道株式会社の略称——に管理されているか、軍に管理されているかなど気にも留めない。

路線によっては軍が車輛<sup>しゃりょう</sup>を運行している区間もあり、せいせい運転手<sup>しんてんしゅ</sup>と車掌<sup>しやうさう</sup>の制服が少し違ってくるの認識でしかないだろう。

他方、皇国の鉄道は諸外国の観光客には人気がある。

大陸一の巨大鉄道で、長距離用編成などはひとつの街を内包していると言われるほど様々な施設が組み込まれている。

食堂車はいくつもの店舗が軒<sup>のき</sup>を連ね、場合によっては散髪店や映画館、演劇場が入った車輛<sup>しゃりょう</sup>なども接続されることがあった。

しかし、それ以上に人気を集める列車がある。  
軍用装甲列車の編成だ。

強固な装甲と砲を備えた戦闘車に、超重量級の列車をぐいぐいと牽引していく魔導動力車、走行する区間ごとに自動的に外装迷彩の模様を切り替える貨物車に、自動人形を寝かせた自動人形輸送車。

各国の旅行会社がこの列車を見るためだけの旅行計画を作り、それを売り出せば一日と経たずに定員いっぱいになるというのだから、人気のほども知れる。

そんな、皇国鉄道の中で特別な地位にある軍用装甲列車の中でも、さらに特殊な編成がある。  
通称『御用列車』。

典雅な名前とは裏腹に、一編成で巡洋艦に匹敵する戦闘力を持つという超重武装装甲列車である。皇王家の紋章を掲げる黒鉄の列車。皇国鉄道株式会社でもなく、軍でもなく、唯一近衛軍の管轄下に置かれる、おそらく大陸最強の列車だ。

その御用列車は今、西方に向かう軌条の上にあった。

「あつはつはつは——畜生ッ!!」

壁を思い切り蹴り上げ、しかしエーリケはすぐにその足を引つ込め、壁の前に屈み込んだ。

自分が乗っているのが皇族専用列車で、内装はどの部分であっても稀少素材の特注品で形作られ

ていることを思い出したのだ。

乗り込んだ際に近衛軍の士官に聞かされた通りなら、予備の材料は用意されているだろうが、通常であれば修理に何ヶ月もかかる。

不可抗力でないかぎり、故意だろうが過失だろうが、空軍に補修費用の請求が回ってくることは避けようがないだろう。

そうなれば当然、彼は各方面から叱責される。

軍においては、生まれや血統など関係ないというのが不文律だ。

むしろカールなど、率先して彼の俸給を差し押さえに掛かるに違いない。

「あ——やっべ、凹んでるし」

美しい木目を見せていた壁材に、靴先と同じ形のくぼみができている。

くぼみのまわりにはひび割れがあり、一枚板を加工して作った壁材は、修理のためには壁の一面を丸ごと交換しなくてはならないだろう。

(しかもこいつ、アルフィウム檜じゃね?)

樹齢千年を超えてようやく幼木と看做されるアルフィウム檜は、樹齢が五千年を超えたところでやっと加工材料として出荷される。その名の通り神樹都市アルフィウムのみで生育する特殊な檜だ。加工されたあとでも生命活動を続け、大気中の魔素を吸収し、大気組成を変化させて環境を整える機能を持っているという。

年間の産出量は両手の指で数えられる程度の本数しかなく、同じ重さの魔導銀よりも高価だと言われていた。故に貴金属よりも貴重な木材と言われ、つい数年前に一枚物の長卓が競売に掛けられた際には、その競売史上もつとも高値が付いたらしい。

そんな高価なアルフィウム檜だが、初代皇王がアルフィウムに訪れた際に植樹した檜の本数にちなんで、毎年三本が皇王家への献上品となり、様々な家具や御用車輛の内装などに使用されている。(へっ、こいつは厄介だ……)

エーリケの額に一筋の汗が浮かんで流れる。

アルフィウム檜の家具など、実家にもひとつかふたつしかない。それも大型の家具ではなく、ひとつは外套掛け、もうひとつはカールの持つ鉄筆の外覆いである。

(確実に切れるぜ、あの親父)

一瞬、どんな顔をして怒り狂うか楽しみたい衝動に駆られたが、自分の命と引き替えにするのは惜しい。なにが悲しくて、自分の父親の怒り顔と命を交換しなくてはならないのか。

(さて、どうやって誤魔化すかな)

あのレクティファールのことだ、素直に謝ればあつさり許してくれるだろう。そしてレクティファールさえ許せば、妹も父親もそれ以上怒ることはあるまい。

(よし、そうしよう)

エーリケは自分の命をレクティファールに預ける決断を下し、近くにあった観葉植物の鉢を移動

させ、壁の凹みを隠す。

様々な角度から植木鉢と壁を確かめ、エーリケは満足げに頷いた。

「よし」

「良くない」

「おおっ!?」

飛び上がりそうな勢いで驚いたエーリケ。

背後にいた人物がケルプであることを認めると、ほっと安堵の息を漏らした。

「なんだ、ケルプか」

「なんだとはご挨拶だね。それはそれとして、壁の修理費は今月の君の給料から天引きしてもらうから。幸い僕らの寿命は長い、人の定年の十倍も働けばなんとか払いきれさ」

ケルプの淡々とした物言いに、エーリケはへらりと軽薄な笑みを浮かべる。

しかし、彼の頭脳は何としてもこの場を切り抜けようと、思考を高速で回転させていた。

空中戦の最中でも発揮し得ないほどの高速回転だ。

「小さいことを気にすんなよ。もちろん修理はするさ。けどどな、今月はちょっと色々あって……」

確かに色々あった。

恋人に贈る婚約用の首飾りの支払いなどだ。

「生憎だけど、僕がどうこう決めることじゃない。ここで隠してあとで皇府殿に知られるか、自分



から『事故』として申告するか、どちらが得か分かるだろう？」

「きったねえ」

「友人として忠告してるんだ。皇府殿だって鬼じゃあない。君が支払いに応じられない理由を話せば、割賦<sup>かつぶ</sup>払いにしてくれるかもしれない」

鬼よりもっと怖いものだ、という事実は、双方とも口には出さない。

他に誰もいないはずの場所で口にした言葉さえ、ルキーティには筒抜けだと考えるべきなのだ。

それほどまでにあの妖精は恐ろしい。恐ろしいからこそ、誰からも尊敬を勝ち得ている。

「——分かった、あとで破損報告を書いておく」

エーリケは観念することにした。なにを取り繕<sup>とぎや</sup>っても仕方がない。軍にいるときのようにいい加減なことをすれば、目の前の友人にも迷惑が掛かってしまうだろう。

「それがいい、僕も貴重な友人の一大事をくだらないことで躓<sup>つまず</sup>かせたくない」

ケルブのそれは本心からの言葉だった。

彼がシヴェイラと結ばれたとき、様々な困難を引き受けて国からの出奔<sup>しゅっほん</sup>を助けたのはエーリケだ。

次は自分が友人を助ける番だ——そう思っていた。

「そういえば、殿下たちは？」

「あー……うん、殿下が二人を押し倒して——」

「な……！」

それは不味い。ケルプの顔色が一気に変わる。

ウィリアムだけなら問題ないが、メリエラは問題が大きすぎる。

ケルプが慌てて走り出そうとしたのを見て、エーリケはその肩を掴んだ。真面目すぎると思っていた幼馴染は、やはり真面目すぎるまま大人になったようだ。

「冗談だ、冗談だ。殿下にそんな甲斐性……じゃないか、積極性があれば、俺たちがこんな苦勞するわけないだろうに」

「確かに……それもそうか」

未来の義兄と義父にひどい評価をされているレクティファールであるが、現在、恋人二人の髪を弄っている最中である。レクティファールの中にある〈皇剣〉には、女性皇王の記録も残っているし、同じように皇妃たちの髪を結うことを趣味としていた男性皇王もいないわけではない。

少なくとも初代皇王などはそうだった。

「二人に似合う理想の髪型を探すと息巻いてたな。マリア様に色々教わつたらしい」

「――母上」

ケルプは疲れたように壁に両手をつき、項垂れる。

こうやって効果的な援護をしてくれるだけなら、心から尊敬できる母なのだが――

「そういうマリア様、最近色んな髪型してたな。てつきり、昔を思い出して色々自分でやってるもんだと思つたが……殿下か」

「言うな、頼むから」

「おーう、俺だつて言いたくないぜ。マリア様、懂れたし」

女性が自分の髪を委ねるといことが、それなりの信頼の証であることくらい、二人にも理解できている。

マリアが自分の髪に自信を持ち、それ故に信頼する髪結師にしか髪に触れさせないことも、二人は知っていた。

「何があるか分からんよなあ、人生って」

「だなあ。僕も国を出るときは、まさか摂政殿下のお供として他国行脚するとは思つてなかったよ」

現実逃避といえればそれまでの、実りのない会話。

互いに課せられた厄介な裏仕事を思い、二人は同時に溜息を吐いた。

「やれやれ、皇府殿も余計な仕事を」

「全くだ」

お互いの言っている仕事があるで逆のものであると気付かぬまま、二人は目の前の友人を慰めるのだった。



ケルプたちがいる車輛の後方に、近衛軍の兵員輸送車輛がある。

元々他国とは一線を画したような兵員輸送車を用いている皇国軍だが、近衛軍の兵員輸送車はさらに多くの改造が施されていた。

御用列車に接続しても見劣りしないよう装飾された外装には、磨き上げられた近衛軍の紋章が輝き、反固定式の魔導探測儀にさえひとつの錆も浮いていない。

御用列車とは国家の威信そのものであり、それに付随する軍勢もまた、国の武の象徴であるとの考えがあるからだ。

そしてこの日、御用列車とともに移動している軍勢は、象徴に恥じないだけの実力を持つ集団だった。

「お疲れ様です」

扉を開けると同時に、同僚たちに挨拶する。

兵員待機室の各所から声が返ってくるが、あまり数は多くない。ほとんどの者は兵員食堂か鍛錬室にいたようだった。

「はあ」

ルルリは更衣室に移動すると、腰の留め具を外して魔動式胸甲を緩め、肩口にある粒体自在管の

接続を解除する。次いで肘上までを覆う籠手を外し、胸甲とともに自分に割り当てられた装備格納棚に並べる。

「は……」

身軽になると、ようやく人心地つく。

ルルリは何度目かの深呼吸を終え、簡易整備機能付きの棚にしっかりと収まった自分の鎧を見た。「憧れ、だったんだけどなあ」

金と銀で彩られた紋章は、それ自体が彼女たちを示すひとつの指標だ。低視認性を求めて地味な色合いになっている他の部隊の紋章とは違い、彼女たちの装備には敵から姿を隠すという概念がない。

皇族の盾である彼女たちが戦う段になれば、視認性などすでに関係ないということだろう。むしろ、目立つだけ目立って皇族から敵の注意を逸らす目的さえあった。

だからこそ、隠れ、騙し、欺きが美德とされる軍の中で、少しも身を隠そうとしない装甲乙女騎士団の紋章は、一部の戦う女性たちにとって憧れの対象だった。

求められるのは容姿と強さ。逆にいえば、そのふたつにさえ自負があるならば、皇王が生き様を認めてくれる。田舎道場の娘として生まれたルルリにとって、装甲乙女騎士団は子どもの頃から望み続けた、自分の生き方を変えずに済む仕事のはずだ。

そう、そのはずだったのだ。

ルルリと乙女騎士の出会い十年前。彼女が暮らす村にやってきた先代皇王の側妃の護衛が、乙女騎士だった。

村に来た理由について、ルルリはあまりよく覚えていない。

その側妃は刺繍が趣味で、村で取れる蚕の糸を仕入れるために来たど大人たちが話していたような記憶が、臍げに残っているだけだ。

側妃は半日程度で村を離れたため、歓迎の式典などはごく簡素だった。それでも前日は大人たちが忙しげに動き回り、子供たちも珍しく汚れの少ない服を着せられ、できるだけ大人しい遊びをするように命じられた。

ルルリは道場で大人たちの鍛錬を眺めたあと、村長の家の近くで乙女騎士と会った。

村で唯一の水車小屋を管理するのが村長の仕事で、その水車のすぐ近くに綺麗な鎧を纏った、鎧よりも遥かに美しい女性が立っていた。

女性は周囲に気を配りながらも、決して気を張ってはいなかった。

彼女たちは常に緊張を強いられているが、それを周囲に撒き散らすことは戒められていた。美しい騎士たちが鬼気迫る様子で警戒をしていると、側妃もその周囲にいる者たちも気が休まらない。

それに、気迫で相手を追い払うならば、乙女騎士である必要はない。通常の兵士を部隊単位で派遣し、完全に周辺を制圧してしまえばいい。

また、妃は国民の母である。

母の前で子どもが不要な緊張を強いられるなど、妃たちにとってこの上ない不名誉だ。

ゆえに、乙女騎士は常に穏やかな気持ちを保ち、周囲を眺める。

ルルリが出会ったのも、そんな騎士の姿だった。

（剣に手を置いているのに、少しも恐くなくて、それどころかわたしに手を振ってくれて、笑ってくれて、強くて優しくて、こんな人たちがいるんだって嬉しくなって……）

以降、ルルリは乙女騎士を目指す。

少しずつ乙女騎士がどんな存在か理解し、その目標の遠さに目眩を感じたが、愚直に進み続けた。内乱の最中、国が減びるかもしれないという恐怖と戦いつつ鍛錬を続け、軍学校の教官に配属希望を提出した。

教官は呆れながらもルルリの希望通り、近衛軍の入営試験を受けられるよう手配してくれた。当時は近衛軍再編と時期が重なり、レクティファールという絶対的な指標もあって、同じように近衛軍を希望する者が多かった。

ただ、装甲乙女騎士団の所属する第一特別護衛旅団については、新人からの配属希望がほとんどなかったという。誰もが希望する前に諦めていたか、ある程度の実績を積んでからの方が有利だと判断したのだろう。

ルルリも当初は、そうすればよかったと後悔した。

乙女騎士の配属試験は他の部隊と異なり、実技試験がない。他部隊からの転属ならば実技試験が

課せられるが、新人に対して実技に期待するところなどないということなのだろう。

ルルリは二回の面接と、一度の身体検査だけを受けた。

もしも希望が通らなければ、おそらく故郷に近い陸軍の部隊に一兵士として配属されていただろう。大半の兵士がそのような経歴の持ち主だったからだ。

(嬉しかったなあ、配属が決まったときは)

軍学校に辞令が届いたとき、教官室は喝采に包まれた。

誰もがルルリの希望が通るとは思っていないが、彼女の願いの強さも知っていた。

駄目なときは次の機会を得られやすいよう、せめて皇都の近衛軍か、皇都防衛軍に配属されるよう手を尽くそう。教官たちは密かにそんな風に思っていたほどだ。

口さがない者たちは、乙女騎士を望むルルリを皇土の情けを狙う女と呼んだ。乙女騎士たちが皇王の愛人と呼ばれることを考えれば、そのような考えに至る者がいるのも仕方ないことだ。

だが、少しでも彼女たちを理解している者は、そんな言葉をまったく気に留めない。気に留めること自体が、乙女騎士の名誉を汚すことだと知っているからだ。

配属が決まったとき、実家に説明するのは大変だった。

ルルリについては、故郷の両親が見合いの準備を進めており、軍学校の卒業と同時にそれを実行しようと考ええていたらしい。

しかし、乙女騎士になるならそういった真似はできない。乙女騎士は文字通り「乙女」しかなら

ないのだ。

乙女騎士になってから実家が見合いの席を用意するのならばいいだろうが、配属前の女性にそれをするのがどのように見えるか。

皇王に対し、「お前はこの見合い相手以下だ」と宣言するようなものである。

(焦ったよねえ。あのときは)

教官たちが慌てて実家を説き伏せたから良かったものの、見合いをするので辞令を辞退する事態になれば、おそらく自分だけではなく教官たちの将来にも多大な影響を与えたことだろう。

ともあれ、ルルリは無事に乙女騎士となった。

希望とともに皇城へと登り、宿舍へと足を踏み入れたときの感動は忘れられない。

だが、彼女の希望に満ちた日々は一日と保たなかった。

(うう……こんなに大変だなんて聞いてないよ……)

ルルリが配属された当時は、摂政レクティファールの戦後改革の真つ最中だった。規模拡張のため多数の乙女騎士が配属されることになり、合格基準を超えた者の上澄みをさらにもう一度選考するという、それ以前の選考方法を緩めたと言われるほどだった。

実際に、例年であれば合格できなかったであろう人物が含まれていたこともあり、その噂は一定の信憑性とともな流布していた。

ルルリも、配属された当初はその噂を信じていた。そうでなければ自分など合格できなかったは

ず、と思い込んでいた。

しかし、噂は所詮噂であり、真実とは違う。

人員を拡充するのは事実だったが、大半は近衛軍以外からの引き抜きであり、まったくの新人はルルリをはじめとしたほんの一部、人数からすれば二〇名程度でしかなかった。ルルリと同じ訓練班になった新人騎士も、黒龍公軍からの移籍者だった。

宿舎で同室になった彼女は、ニーズヘッグ公爵家の分家筋出身を自称していた。その見事な黒髪を見る限り、出自に嘘はなさそうだったが、ルルリよりも高い身長からすると、ニーズヘッグ公爵家の嫡流からはある程度離れていることも窺えた。

ニーズヘッグ公爵家の女子がみなほとんど変わらぬ姿をしていることは、ある程度の一般知識を弁えた皇国の民ならば誰もが知っている。

それを不思議と思う者がいないわけでもなかったが、そもそも龍族のなんたるかを知らない大多数の者たちにとっては、「ニーズヘッグ公爵家とはそういうもの」でしかなかったのだ。

「まあ、本家のことはわたしもよく分からないし、あなたも気にしなくていいわよ。今のところ、摂政殿下に夢中で、他のひとには興味ないだろうし」

ルルリはカティアという名前の、自分より随分と年上の同期とそこそこ仲良くなった。そして、雑談の中でカティアが公爵家を評したのは、その一度だけだった。

おそらく彼女たちにとつても、ニーズヘッグ公爵家というのは理解しがたい存在なのだろう。分家筋といつても本家との繋がりはほとんどなく、そもそも分家がどこから始まったのかさえ分からないというのだ。

しかし、カティアの血統は間違いなく皇国守護の一角だった。

重力制御魔法を手足のごとく操り、それを転用した近接格闘術を得意とする彼女に、ルルリは訓練中幾度も土の味を確かめさせられたものだ。

地元では負け知らず、体格に恵まれた年長の男子さえ簡単にあしらってきた彼女にとつて、装甲乙女騎士団は初めて経験する格上ばかりの環境だった。

訓練では負けが込み、たまに拾う勝利も後が続かない。

なにをどう間違つて自分のような本当の意味での新人を騎士団に入れたのか、寝台の中で延々と悩む日々だった。

「ルルリ、お風呂空いてるわよ。早く入ったら？」

「あ、はい！」

裸身に湯織り布一枚巻いただけの先輩騎士が、彼女の背後を通り過ぎながら声を掛ける。更衣室の奥には浴槽まで備えた浴室があり、彼女たちのために常に湯が張られている。

(これ、列車の中なんだよねえ)

生体端子付きの鎧下を脱ぎ、洗濯用の籐籠に放り込む。

すると、身体に纏わりついてきた布と一緒に、少しだけ気分が軽くなった。

「よしっ」

両の頬を叩き、浴室へと向かう。

自分に特別な力がないのは分かっている。ならばこれから作ればいいのだ。

先祖代々伝わる武術は、ただ黙っているだけで強さを与えてくれるものではない。鍛錬を積み、身も心も高めることで、ようやく階のひとつを昇ることができる。

「ルルリ・ササ。入ります！」

気合十分。

彼女は力強く足を踏み出した。

「あえっ!？」

そして、力強く足を滑らせ、中にいた先輩騎士たちが驚愕の眼差しを向ける中で、彼女は盛大に素っ転ぶのだった。



皇国使節団の動きは、大陸安全保障会議参加国にとって注目の的だった。

御用列車で国境まで移動すると、そこから先は様々な乗り物を使い継いでいく。

当初は龍による移動が考案されたが、たとえ一頭でも龍は龍である。ほとんど戦闘能力がない飛竜に籠を抱えさせた旅客籠ならともかく、建前上——使節団の構成員に龍族がいることはどの国も触れなかった。特定種族への批判は、場合によっては差別と受け止められてしまう——戦闘能力を持つ近衛軍の龍が領空へ侵入されるのを拒む国は多かった。

無論、皇国側が押し切ることができたろう。

直前に首都への攻撃が行われたわけで、摂政一行の安全を考えるなら空中を移動した方が危険は少ないのだ。

何かあっても健翼の龍ならば逃げの一手で安全域まで飛べるだろうし、経路上にある国々にとっても気を張る時間は少ない方がいい。

だから、彼らは皇国側が少しでも押ししてくれたなら龍の使用を認めるつもりでいた。

友好国の実質的君主を危険に晒すわけにもいかないのだから、国民への説明もそう難しいことではない。自国と皇国の友情物語でも適当にでっち上げるだけで、あまりものを考えない国民なら目を逸らすことができるし、頭が回る国民相手には実利を説けばいい。

少なくとも皇国側に彼らと敵対する意思はないのだから、無理に龍の使用を拒否する必要性はなかった。

「——だというのに、あの連中は……!!」

〈シエルミア共和国〉本土防空軍司令官フレンチ中將は、ゆっくりと国土を移動する皇国使節団

の姿に拳を震わせた。

「嫌がらせか！ 一度でも突つばねたのだから、責任を持って安全を確保しろということか!! こそつたれめ！ そっちの方が予算も食い潰すからなァッ!!」

数世代前は機族だったというフェレンツだが、先祖の感情の乏しい姿が想像できないほどに怒り狂っていた。

彼女は皇国の打診以前から、使節団の安全を考慮して領空の通過を認めるべきだと政府に進言していた。

「はははっ、予備費がどんどん減っていくぞ、フェリ。俺の妻の宝石でも減らそうか？」

そんなフェレンツを楽しそうに眺めているのは、国民によってこの国の主とされたシエルミア国王、ルシエルその人だった。

「笑いごとじゃない！ なんなんだ国防省の連中は！ 国の名誉？ 国家の威信？ ふざけるな！ しょうもない戦争で皇国に借りを作った挙げ句、またこうやって狭量を晒して余計な借りを相手にくれてやった！」

「そのようだな、うん。実際そうなってしまったものはしょうがない」

「貴様も貴様だ！ こうなることは分かっていただろう。なぜ止めない！」

「止められるものか。俺は国王だが、軍の指揮権を持っていないからな」

軍の指揮権どころか、なにひとつ実権など持ち合わせていない。それがシエルミアの国王という

ものだ。

国王という存在を打ち倒すよりも、国家の象徴として議会の管理下に置いた方が面倒が少ない。共和国建国の立役者たちはそう考え、その通りに実行した。

共和国の最強戦力である装甲機兵を駆る国の守護者。周辺に軍事国家がひしめき合う状況下で、これほど国民を安心させられる存在はなかった。

幸い、装甲機兵の操縦者は機族でなければならず、機族とは自らの欲望というものをほとんど持たない。共和国政府は国民選挙によって象徴国王制の導入を決め、ルシエルの先祖は実権を持たない国王となった。

一応、即位選挙制度があり、即位は主権者である国民に委ねられている。だからこそ、共和国は国王を戴きながらも共和国のままなのだ。

「だが、無視はするまいよ。助言でも提案でも、独り言でも構わんじやないか」

「あまりやりたくないのさ。政府の連中は、俺が皇国の若き摂政と同じことをするんじゃないかと怯えているからな」

「同じこと？」

「軍事政変さ」

自嘲気味に笑うルシエルに、フェレンツは目を白黒させる。

「おい、あの摂政がいつ軍事政変やらかしたって？ むしろあるべき形に政府を立て直したただけだ

ろう」

「でも、法の上では軍事力を用いて国権を掌握したということになっているようだよ。まあ、権力の空白期を作るよりも、多少非合法に近くとも、間断なく政府が連続している方が、厄介ごととは少なくて済む。いちいち政府の正当性なんて主張している暇はないからな」

当代皇王——無名皇と呼ばれる——からレクティファールに国事国政の総てが継承される間について、どのような体裁を整えるかは、皇国内でも多めに採めた。

名を抹消された無名皇が正式な皇王として記されているのも、その結末のひとつだ。

「その辺の面倒ぶりはうちとよく似てるぞ。法律の弾力的運用は結構なことだが、いい加減に法律の方を弄った方がいいんじゃないかね。皇国を做つてな」

最後のひと言を呟くルシエールの声は、これぞ機族の声と言わんばかりの冷徹なものだった。

フェレンツは彼女の声に身を震わせる。

「俺も元々は軍にいたからな。軍というのが、平時ではこの上なく非効率的な組織であることは分かっている。そして政府では、平時も有事も効率なんて関係ない、ただ頑丈で復元性が高いことばかり考えられている」

「——いいことじゃないか」

フェレンツは目の前の『国王』が、共和国以外ならばなんの障害もなく本物の『国王』として振る舞えるだけの才覚を持っていると知っていた。

それこそ彼が望むなら、旧来の意味でもこの国の王になることができただろう。

軍は元々国王に対する忠誠心が高い。自分たちの守護神に対して忠誠を抱かない方がおかしい。

たとえそれが象徴的なものだとしても、自分たちの命を守るだけの力が備わっているならば、兵士たちはそれに縋ろうとするだろう。そうすることで心の均衡を守ることができるとしたら、士官さえ国王を信仰するはずだ。

「あのまま軍でお前と一緒にいられたら、どれだけ良かったか」

「その話はしない約束だ」

ふたりは軍にいた頃、いや、それ以前から親しい間柄だった。

ルシエールは国王になる可能性がさほど高くなかったこともあり、比較的自由に青春時代を過ごすことができたのだ。

事情が変わったのは彼が士官学校に入った直後で、機族にのみ強い毒性を持つ細菌性の病が王族内で蔓延するという事件が発生した。

多数の国王候補者が命を落とすし、流行の外にいたルシエールが、玉突き的に次期国王候補の筆頭になってしまった。

それでも彼は、フェレンツとの交際をやめようとはしなかった。彼女は機族に連なる系譜だ。その気になれば王妃になることもできる。少なくともルシエールはそう考え、近しい者たちにその意思を打ち明けた。

だが、そんな彼の考えは認められなかった。

議会によって、より先祖の血統に近い現在の王妃が婚約者として選ばれ、ルシエールはそれに抗うという選択肢を持つことさえ許されなかった。

「俺は何もできなかったし、きつとこれからも何もできない。議会の使いっ走りとして、あの古臭い人形に乗り続けるさ」

共和国は決して裕福な国ではない。

かつての独立戦争の折、国の基幹産業となり得る前文明の遺産のうち、半分以上が破壊されてしまったためだ。

もともと皇国に次ぐ品質の魔導鉱石が採掘できる大鉱床があるシエルミア地方は、その産出と加工で潤っていた。先史文明の遺産である産出機構と加工施設は、シエルミアを分不相応な地位へと押し上げ、それを維持させるに十分すぎた。

しかし、戦争がそれを変えてしまう。

装甲機兵を擁する政府軍に対し、反体制派は徹底的な非正規戦を展開。政府の財政に打撃を与え、各地の産出機構及び加工施設を破壊して回った。

当時、アニユア・ハイストなどの民主活動家に率いられた民衆の力はかなり強かった。彼らは、戦争が続けば続くほど味方を増やしていく。

破壊工作によって国の財政が悪化すれば、政府がどれだけ取り繕っても国民の生活への影響は避

けられない。

そして民衆は、自分たちの苦境の原因だったはずの反体制派に身を投じる。反体制派の言う「一部の特権階級による搾取」は、決して嘘ではなかったのだ。

王侯貴族による先史文明の独占。装甲機兵の占有による軍事力の支配。それは覆しようのない事実として人々の心に刻まれ、それはそのまま反体制派の力となった。

またそれについては、隣国が皇国であったのが最大の不幸だったと言う歴史家もいる。

皇国は絶対君主制を敷きながら、国民はまったくと言っていいほど搾取を受けていなかった。国境ひとつ向こう側の民はあんなにも幸せそうなのに、なぜ自分たちは苦しい思いをしなければならぬのか。

国交があり、国民の交流が盛んであるからこそ、その差は人々の目に鮮明に映ったことだろう。

「——まあ、今も昔も変わらないか」

ルシエールは、黙り込むフェレンツの頭を軽く叩き、窓の外を眺める。

こうして自分が好き勝手に歩き回れるのは、政府の目が皇国使節団に向いているからだ。そして皇国使節団に視線を向けているのは、政府ばかりではない。

フェレンツの執務室には、共和国首都で発行されている新聞がいくつも積んであった。どれもが皇国の首都で発生した事件を報じ、その決着を模索するための使節団の派遣を喧伝している。

大多数の論調は皇国に同情的で、批判的なのはそもそも絶対君主制を心の底から憎む、民主原理

主義を掲げる新聞だけだった。

当然だ。

今回の騒動は、軍同士のぶつかり合いではない。

首都という、各国の民間人がいる場所で引き起こされた戦闘だ。

無論、皇国側の防備の甘さを指摘することはできるし、実際にそうしている者も少なくはない。だが、皇都に対する攻撃が正しかったと言える者はいない。

民間人への攻撃は、それが軍事的措置であったとしても批判されるのだ。軍事的目的もない偶発的な攻撃は、批判されるのが当たり前だった。

「上手いものだ。俺も見習いたいな」

新聞社の手綱の握り方についてだろう。皇国はシエルミアの新聞社でさえ、自分たちに優位な記事を書かせられる。

フェレンツはルシエールの気持ちがよく分かった。

シエルミア国内の新聞は様々な企業によって運営されている。政府に対する姿勢も様々だ。

政府だけではなく国王制度に対する姿勢も様々で、敬意を払う新聞もあれば、単なる制度のひとつとして機械的に捉える者もいる。廃止論は下火だが、失われることはない。

「君との仲を完全に断つたのも、彼らだった」

「あれは仕方ないことだ。誰が悪いわけでもない」

その言葉は果たして誰に対するものか、ルシエールは頭を振るフェレンツを一瞥する。

国王は装甲機兵を操る力を持たなければならない。

それは、国を維持するための大前提だ。そしてその力とは機族としての能力であり、機族の血が薄まれば能力も薄れると考えられていた。

後世の研究からすると、この考えは正しくもあり、間違ってもいた。

装甲機兵の操縦については、機族でなければならないという理由はない。装甲機兵は何らかの手段で機体の統括機構と同期可能な者が操縦できるのであり、これは機族である必要はまったくなかった。

実際、ここから百年も経たない内に装甲機兵の操縦者は機族ではなくなっている。ルシエールの血統ではあるものの、身体組成は機族ではなく混血種の女性が操縦するのだ。

ただ、この当時にそれを知る者はなく、さらに遡ること十数年前のシエルミアでそれを理解している者などいなかった。

だから、シエルミアの命運はこの時点で決まっていたと言える。

その他の国と同じように、命脈を保つには彼らは遅すぎたのだ。

「あと三〇年ってところか」

「何がだ？」

フェレンツはルシエールの言葉の意味が分からない。

ルシエールが何を見ているのか、もう彼女には分からない。

「いや、俺が悠々自適の隠居生活をできるまでの時間さ」

「おいおい、三〇年も現役を続けるつもりか？ もっと前に後進に道を譲れよ」

「はは、そうだな。——そうなるよ、いいな」

〈シエルミア共和国〉国王ルシエール。

後に軍事政変によって国を奪い取り、その全権をもって降伏。

結果、彼は最初にして最後の真のシエルミア王となる。



列車が急に速度を落としたのは、ケルブとエーリケが昼食を摂っているときだった。列車の現在位置は、グラッツラーまであと一日の峽谷地帯。

地図の上では〈ライバツハ王国〉と呼ばれる国でのことだった。

制動機の甲高い摩擦音に、食堂車の給仕を務めていた乙女騎士が小さく悲鳴を上げ、二人は顔を見合わせると、昼食を放り出して状況の把握に走る。

「もし、何があったのですか？」

ケルブが、客室から飛び出してきた男に声を掛ける。

「ああ、どうにも私には事情が分からず……」

男は〈ライバツハ王国〉の外交局が送り込んできた連絡官僚だった。

皇国使節団の領内通過について、あらゆる便宜を図るために列車に同乗しており、ケルブたちとも何度か会合を持った。しかしその官僚も停車した理由については心当たりがないらしい。

「分からねえならしょうがない。直接確かめてみるさ」

ふたりは官僚とともに動力車へと向かうが、途中で周囲の風景を見る機会があった。今列車がいるのは、切り立った崖の途中——片や下まで百メートル以上の崖、片や数百メートルの絶壁だった。「どうした」

操縦席に入ったエーリケが問うと、列車の運転手役だった乙女騎士が困惑したように前方を指し示す。大陸中のあらゆる乗り物に精通しているという乙女騎士で、よくレクティファールと楽しげに会話をしているのを、彼とケルブも見ることがある。

男というのは、乗り物に対して並々ならぬ興味を抱くものなのだ。

そんな楽しそうな一幕をそと物陰から見詰めている二対の目があることなど、レクティファールは知らないだろう。

知っているのは、その嫉妬に満ちた視線を遮るべく、様々な努力を重ねたエーリケとケルブだけである。

「曲線道を抜けたら、あれが……」

乙女騎士が指しているのは、線路の上を占有する巨大な岩だった。

よく見れば軌条が歪んでおり、かなりの力で線路にぶつかったことがわかる。

周囲に細かい岩石が散らばっているところを見ると、崖の上から落ちてきたものなのかもしれない。

「——おい」

エーリケに対し、ケルプが頷く。

「分かってている。前の列車がここで落石を確認したという情報がない以上、前の列車が通過したあと、この列車がここに来るまでの間に落ちてきたことになる」

それは偶然だろうか。

重要な連絡路である軌道が走っているこの路線は、恩恵を受ける複数の国が合同で管理している。運転席から崖を見上げれば、落石防止用の鋼杭が打ち込まれ、鋼索の網が張られているのが見えた。

「そんな莫迦な……。三日前に点検したばかりだぞ……」

連絡官僚の呟きに、エーリケたちは聞かない振りをしてやった。

彼らにとつても予想外なのは分かる。こんなところでレクティファール一行を足止めしても、彼らにはなんの利益もないのだから。

「事情は分からないが、殿下には列車から出ないようお伝えしろ。部隊の責任者は——」

ケルプが、特別護衛旅団の最上位者の居場所について確認しようと口を開くが、返答は動力車の入り口からすぐにもたらされた。

「こちらに」

花浅葱の髪を一つに纏めた乙女騎士。瞳は複数の素子が集まった複眼だった。光を反射し、様々な色合いを見せている。

「近衛軍侍女大佐、カリメーラ・ギガス。お呼びでしょうか」

精霊種薄翅族。瞳が特徴的な亜人種族だ。そして、女性しか生まれない種族でもある。

乙女騎士の中に幾らか交じっている、皇王の血を取り込むために配属された乙女騎士のひとりだった。

ケルプは複眼の中に幾人も映し出されている自分の顔を見詰めながら、カリメーラに向き直る。

「失礼、大佐殿。あの岩の撤去についてご相談したいと思っております」

「そうでしたか、ならば、先ほど殿下より『万事任せる』とお言葉をいただきましたので——」

列車の横を数十名の乙女騎士が駆け抜けていく、ケルプとエーリケはその光景を見て、お互いの顔を見た。

まさか、あんな人数で対応するつもりなのだろうか。

「では、五分お待ちください」

「五分ッ!？」

二人は同時に叫んだ。

魔導師を要する部隊であっても、一時間は掛かる仕事だ。

それ以外の工兵部隊なら、数日掛かるかもしれない。

「ええ、五分ならば列車の運行速度の調整で吸収できますので。——何か問題が？」

「いえ……」

「別に……」

薄翅族の目に睨まれるのは、他の種族にとつてあまりいい気分ではない。

その際立った差異のため、過去にはヒトとは違う種族として迫害されていた。

「問題ありません。五分で総て撤去いたします」

一礼して操縦席を出るカリメーラの背を、二人は恐々としながら見送った。



「侍女大佐殿！ 破砕準備完了しました！」

カリメーラが車輛の外に出ると、彼女の副官がそんな報告を持ってきた。

破砕準備と言いつつも、重機などを使う予定はない。大規模な魔法も必要ない。

「分かりました。では、破砕はルルリ侍女一等兵に」

「了解！」

駆け出す副官のあとをゆつくりと追いながら、カリメーラは自分の指揮下にある部隊を見渡した。特別護衛旅団の遠征大隊。臨時編成とはいえ、これだけで小国の軍隊を凌駕する戦闘能力を持っている。

落石の処理など、何の問題もない。

部下たちの能力をひとりひとり脳裏に思い浮かべていたカリメーラは、この状況下でもっとも適した力を持つ部下の名前を呼んだ。

「ルルリ侍女一等兵」

「はい、侍女大佐殿！」

混血種の乙女騎士が、カリメーラの言葉に応える。

明るい橙色の髪とよく動く瞳を持つ、活発な印象の新人騎士だった。

カリメーラ自身が選んでこの部隊に配属させた娘だ。

「あなたがあの岩を破砕する。問題はありませんね？」

「は……はッ！ ありません！」

ルルリは岩を一瞥し、生唾を呑み込んだあとに大きく返事をした。

カリメーラは満足そうに頷いたあと、鋭い声で命じる。

「では、破砕開始！」

「了解しました！」

ルルリが敬礼し、岩の近くへと走り寄る。

近くには補助役の騎士たちが並び、破砕後の処理に備えた。

軌道が曲がっていけば、錬金術を使って修正する必要がある。

「準備よし！」

「破砕係準備よし！ 防御係準備よし！ 錬金係準備よし！」

ルルリの準備完了の声に、次々と新たな完了報告が加えられていく。

最終的な準備完了の合図まで、展開から二分だった。

「総員準備よし！」

「状況を開始せよ」

カリメーラの命令が下り、ルルリは肩幅に開いた足を地面に押しつける。

呼吸を整え、整流した魔力を右の拳に集中させる。

「」

全身の筋肉に術式を展開し、最後に拳の先に魔法陣を投影した。

魔法陣は直径三〇センチ程度の小さなものだ。描かれた文様は、それが伝播型の魔法陣であることを示している。

「――騎士ルルリ、参ります！」

体外に魔力は漏らさない。

練り上げた魔力は腕の回路を通り、魔法陣を抜け、拳を突き立てた巨岩へと伝達される。

「――抜きました」

ごうん、と空気が鳴る。

その音に触発されるように、岩に無数の罅が入った。

「粉碎します」

術式の展開。

橙色の魔力が岩を砕き、残骸を崖の下に吹き飛ばす。

「術式消去。破砕、完了しました」

ルルリは大きく深呼吸し、そう宣言した。

それに対し、喝采はない。

乙女騎士にとっては、特筆するほどの技術ではなかった。

似たような技術を持つ乙女騎士は少なくない。ただ、ルルリの得意とする拳という身体の延長線上から放たれる術は制御がしやすく、こうした場では非常に役に立つ。

カリメーラは、自分が選んだ部下が自分の望む通りの仕事を成し遂げたことに満足し、大きく頷いた。

「錬金係、軌道の補修開始！」

「鍊金、交替します！」

駆け寄ってきた先輩騎士たちが、ルルリの肩を叩いていく。

そんな無言の賞賛だけで、新人騎士の胸は温かくなった。

(よかった……役に立てて……)

ルルリは鍊金班に場所を譲りながら、列車側へと下がる。

そこで、背後に立った人物が、彼女の肩を軽く叩いた。

「——うん、見事な手際で結構。人材が豊富なのは良いことだ」

「は、ありがとう——」

男の声。

ルルリは列車の中にいる派遣団の誰かだと思い、振り返った。

しかし、そこにいたのは派遣団の一員でも、その長を務める人物であったのだ。

「で、ぜんか……?」

「うん、良い仕事だった。ご苦労」

そこにいたのは、摂政レクティファールだった。

カリメーラが非常に珍しいことに驚愕の表情を浮かべているところを見ると、なんの前触れもなく現れたらしい。

「私がさっくり斬るうかとも思ったけど、必要なかったようだ」

「ひゃ、ひゃい！ ありゆがとうごじゃましゅ！」

既に言葉の体をなしていないルルリの声。

レクティファールはそんな返答にも笑みを浮かべ、もう一度彼女の肩をぼんと叩いて列車へと戻っていった。

ルルリは今しがた叩かれた自分の肩を見詰める。

(殿下？ 摂政殿下？ あのレクティファール殿下？ えええええええッ!?)

何故だどうしてだ自分はいつたいどのような状況に陥ったのだ。

ルルリはぐわんぐわんと頭蓋の中で音が響いているような錯覚を感じたあと、総てを手放した。

「きゅう」

緊張のあまり、気絶したのだった。